

下宅部遺跡の編組製品および 素材束の素材からみた 縄文時代の植物利用

An Aspect of Plant Use during the Jomon Period Viewed from the Weaving
Materials from the Shimo-yakebe Site

佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・能城修一

SASAKI Yuka, KOBAYASHI Kazutaka, SUZUKI Mitsuo and NOSHIRO Shuichi

はじめに

①縄文時代の編組製品の素材に関わる研究史

②試料と方法

③結果

④考察

おわりに

【論文要旨】

縄文時代の編組製品は、破片で出土する場合が多く、全体像や用途が不明な場合が多い。また脆いため、素材となる植物の種類が同定される事例は出土量と比べて少ない。しかし民具をみる限り、編組技法と素材となる植物は製品の用途（機能）と密接に関わっている。したがって、素材を同定する作業は、編組製品の素材となる植物が明らかになるだけでなく製作技法や用途を検討する上でも重要である。東京都下宅部遺跡では、縄文時代中期中葉から晩期中葉までの編組製品50個体と製品の素材植物を束にした素材束2個体が出土しており、残存状況も良かった。本稿では、既報の素材植物の同定結果に加えて、編組製品7個体と素材束1個体についてパラフィン包埋切片法による同定を行い、素材となる植物の種類と加工方法について検討した。この結果、下宅部遺跡出土の22個体の編組製品と1個体の素材束には、タケ亜科が用いられ、その母植物はアズマネザサと推定された。さらにパラフィン包埋切片法による素材の断面形状の観察によって、タケ亜科の稈を割り裂いた後に内側が人為的に削られて、厚さが調整されている様相が植物組織から初めて明らかになった。また製品に使用されている素材は、未成品の割り裂いた素材束と比べると薄く、素材束の素材も現生の稈の厚さよりも薄く、加工段階によって厚みが調整されていた。

下宅部遺跡の結果をふまえ、既報の縄文時代の編組製品の素材となる植物に注目し、素材として用いられた植物の地域性について検討した。

【キーワード】 縄文時代、タケ亜科、パラフィン包埋切片法、編組製品、編組製品の素材植物